

琵琶湖の自然と人々の暮らしに関する研修

私たち上智大学地球環境学研究科の学生5名は、柘植教授の引率のもと、2026年3月6日（金）から3月8日（日）に滋賀県を訪問し、博物館での学習、行政担当者へのヒアリング、現地視察等を通して、琵琶湖の自然と人々の暮らしについて学びました。

1 日目

魚のゆりかご水田についての学習

農業と環境保全を両立させる持続可能な取り組みについて理解を深めることを目的として、滋賀県庁において「魚のゆりかご水田」プロジェクトおよび琵琶湖の環境保全に関するヒアリングを行いました。

琵琶湖は約400万年の歴史を持つ世界有数の古代湖であり、多くの固有種が生息しています。その中でもニゴロブナは代表的な魚であり、春になると産卵のために水田へ遡上する習性を持ちます。このことから、水田は単なる農地ではなく、魚類の産卵や成育の場として重要な役割を果たしてきました。すなわち、湖・川・水田は相互に結びついた一体的な生態系を形成しているといえます。

しかし、昭和40年代以降、圃場整備や排水路の整備が進められたことにより、水田と水路の間に高低差が生じ、魚が水田へ遡上することが困難になりました。その結果、水田が持っていた「魚のゆりかご」としての機能は失われ、生態系にも大きな影響が及びました。

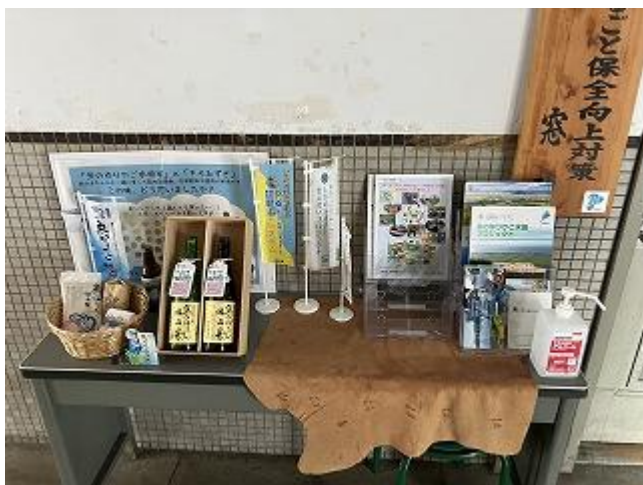
こうした課題に対応するため、滋賀県では「魚のゆりかご水田」プロジェクトが推進されています。この取り組みでは、魚道の設置や水位の調整などにより、水田と水路の連続性を回復させ、魚が再び水田に入り、産卵や成長ができる環境を整備しています。また、水田の水管理を工夫することで、魚の生育に適した環境づくりが行われています。

さらに、この取り組みのもとで生産された米は「魚のゆりかご水田米」として認証されており、農薬や化学肥料の使用削減など、環境に配慮した栽培方法が採用されています。加えて、魚類の繁殖状況の確認や生産過程の記録管理が行われることで、安全性と環境価値の両立が図られている点も特徴的です。

この取り組みは、生きもの、琵琶湖、農家、子ども、地域の五つの側面において効果をもたらすとされています。具体的には、生物多様性の保全、水質の改善、農産物の付加価値向上、環境教育の推進、地域活性化など、多方面にわたる利点が確認されています。

本ヒアリングを通じて、農業と環境保全は必ずしも対立するものではなく、適切な制度設計と技術の導入によって両立可能であることを学びました。また、環境に配慮した農産物がブランド化されることで経済的価値を生み出す点は非常に重要であり、消費者の環境意識や支払意思額とも深く関係していると考えられます。以上のように、「魚のゆりかご水田」プロジェクトは、自然環境と農業を結びつけた持続可能な

取り組みであり、地域社会・経済・環境の三者にとって有益なモデルです。今後、このような取り組みがさらに広がっていくことが期待されます。



▶「魚のゆりかご水田」プロジェクトに関する展示物

2日目

針江生水の郷視察

二日目は、針江生水の郷を視察しました。針江では比良山系に降った雪や雨が伏流水となり、各家庭から非常に清浄な水が湧き出しています。この湧水は「生水（しょうず）」と呼ばれています。地域住民は、この生水を飲料水や炊事などの日常生活に利用しており、その利用システムは「川端（かばた）」と呼ばれています。針江では各家庭に川端が設けられています。今回の視察では、ガイドを務める地元住民の方の案内のもと、見学に協力していただいた複数の家庭の川端を見学しました。



▶川端の様子



▶川端から汲んだ水

この川端では、野菜や穀物を洗うほか、飲料水として利用するなど、現在も日常的に利用されています。私たちも実際に水を飲ませていただきましたが、非常に澄んでおり、美味しかったです。湧水を直接飲む機会は少ないため、貴重な体験となりました。また、川端にはコイが放流されています。これは、水草や残飯を食べることで水をきれいに保つ役割を果たしているためです。そのため実際に、使用後の鍋や食器を水につけておくこともあるそうです。かつては飼育したコイを食用としていた時期もあり、湧水で育つことで臭みがなく、美味しかったとされています。現在では、多くの家庭でペットのような存在として放流されているとのことでした。



▶鍋を水につけている様子

また、針江で湧き出る水は、夏は冷たく、冬は比較的暖かいという特徴があります。そのため、冬季には水を流すホースを道路に設置し、湧水の温かさを利用して雪を溶かす工夫が行われています。



▶湧き水が流れるホース



▶大川

針江で湧き出た水は最終的に大川へと流れ込みます。大川を流れる水の約7～8割は湧水によるものであり、実際に視察した際には、川底がはっきりと見えるほど非常に透き通っていました。また、針江大川の河口部には中島と呼ばれる内湖があり、魚の産卵や生育の場となっています。一方で、他の内湖の中には、戦前・戦後の食糧不足

を背景に水田へと転換された場所もあり、これが魚類の減少の一因となっています。このことから、針江から流れ出る湧水は、水質の維持だけでなく、生物多様性を支える貴重な環境の形成に貢献していることがうかがえます。

今回の視察を通して、針江では昔から水を活かした生活が継承されていることを実感しました。また、地域の方々が藻刈りや清掃、ガイド活動などを通じて、その環境の保全と魅力の発信に努めている点が印象的でした。こうした地域の方々の結束や継続的な取り組みが、針江の美しい景観を支えているのだと感じました。

大津市歴史博物館見学

次に、大津市歴史博物館を見学しました。館内の展示を通じてまず圧倒されたのは、大津という街が持つ歴史の重層性です。天智天皇が遷都した近江大津宮に始まり、延暦寺や三井寺の門前町として、また東海道五十三次の最大の宿場町として栄えた歴史の変遷を辿ることができました。しかし、それ以上に私の目を引いたのは「琵琶湖水運の拠点」としての大津の姿です。丸子船が行き交い、全国から集まる物資の集積地であった大津は、まさに「水」によって生かされ、発展してきた街でした。人々がいかにして湖の特性を理解し、その恩恵を最大限に引き出しながら都市を形成してきたのか、そのダイナミズムをありありと感ずることができました。

環境を研究する者として、今回の見学で得た最大の収穫は「大津の歴史は、そのまま人間と琵琶湖の環境史である」という気づきです。かつての図絵やジオラマからは、人々の暮らしが琵琶湖の汀（みぎわ）と密接に結びついていたことが読み取れます。水際のエコシステム（生態系）と人間の経済活動が境界線なく溶け合っていたかつての姿は、現代の私たちが目指すべき「自然との共生」の一つの原風景と言えるかもしれません。一方で、近代化以降の都市開発や交通網の整備が、大津の景観や琵琶湖の水質・環境にどのような影響と変化をもたらしてきたのか。歴史の連続性のなかで環境問題を捉え直すことで、現在の滋賀県が直面している課題の根源的な背景がより立体的になってきました。



▶博物館前から琵琶湖を眺める様子

3 日目

近江八幡と彦根城での地域活性化についての学習

三日目は、二手に分かれて、それぞれ近江八幡市と彦根市にある彦根城を視察しました。

近江八幡

近江八幡市は琵琶湖の東岸に位置する人口約8万人の都市です。古くから交通の要衝として発展し、戦国時代には豊臣秀次によって八幡山城の城下町が整備されました。また、近江商人の発祥地の一つとしても知られ、全国各地で活躍した商人たちが築いた豊かな文化や町並みが現在も受け継がれています。

近江八幡市の発展を支えてきたのが、水と深く結びついた歴史です。市内には琵琶湖最大の内湖である西の湖が広がり、豊かな自然環境を形成しています。かつては琵琶湖と市街地を結ぶ八幡堀が整備され、物資や人々を運ぶ水運の拠点として大きな役割を果たしていました。現在では物流機能は失われているものの、美しい水辺景観が残され、市民や観光客に親しまれています。

著名なヴォーリズ建築群も見学しました。アメリカ出身の建築家であり教育者、実業家でもあったウィリアム・メレル・ヴォーリズは、近江八幡を拠点に活動し、学校や教会、住宅など数多くの建築物を設計しました。これらの建物は人々の暮らしや使いやすさを重視した温かみのあるデザインが特徴です。実際に建物を見学すると、地域の景観や生活文化に調和した落ち着いた佇まいが印象的であり、近江八幡の歴史や文化を形づくる重要な資産であることを実感しました。

近江八幡には、八幡堀や八幡山、近江商人の旧宅群に加え、ヴォーリズ建築群など多様な歴史資源が残されています。また、今回は訪問しませんでした。西の湖周辺ではヨシ原が広がり、自然観察や舟遊びを楽しむことができます。歴史文化と自然環境が調和した魅力的な観光地であり、その人気の理由を理解することができました。

高度経済成長期には八幡堀の埋め立てが検討されましたが、市民運動によって保存が進められました。その結果、歴史的景観が守られ、現在では市を代表する観光資源となっています。旧城下町や日牟禮八幡宮周辺の八幡堀などの地域は、滋賀県初の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。また、西の湖とその周辺に広がるヨシ原や伝統的な農村集落が織りなす景観は、「近江八幡の水郷」として全国で初めて国の「重要文化的景観」に選定されました。ヴォーリズ建築群についても保存・活用が進められており、単に建物や景観を保存するだけでなく、それらを地域活性化や観光振興に結びつけている点に大きな意義を感じました。

今回の訪問を通じて、近江八幡市は湖や水運によって育まれた歴史と文化を大切にしながら、それらを現代の観光や地域振興に活かしていることを学びました。自然環境、水辺景観、歴史的町並み、そしてヴォーリズ建築群が一体となって独自の魅力を形成しており、市民による景観保全やまちづくりの取り組みも含めて、多くの地域にとって参考になる事例であると感じました。



▶新町通りの街並み



▶八幡堀



▶旧八幡郵便局（ヴォーリズ建築）

彦根城

彦根城は、江戸時代初期に築かれた城であり、現在も天守が残る貴重な歴史的建造物です。彦根城の天守は国宝に指定されており、城郭としての歴史的価値が非常に高い場所です。また、城の周辺には堀や石垣、庭園、古い町並みが残されており、歴史文化と自然環境が一体となった景観を形成しています。



▶彦根城

彦根城を見学して印象的だったのは、城が単なる観光施設ではなく、地域の自然環境と深く結びついている点です。城の周囲には内堀や外堀があり、水辺の景観が城の美しさを支えています。堀の水面には鳥の姿も見られ、都市の中にありながら、生き物のすみかとしての役割も果たしていると感じました。また、城内には多くの樹木があり、石垣や坂道とともに、歴史的景観と緑の環境が調和していました。



▶彦根城天守から見た景色

彦根城では、急な階段や坂道を実際に歩きながら見学しました。天守までの道のりは少し大変でしたが、その分、当時の城の構造や防御の工夫を体感することができました。高い場所からは琵琶湖や彦根市街を見渡すことができ、彦根城が地域の地形や水環境と密接に関わって築かれていたことが分かりました。特に、琵琶湖に近い立地は、交通や防衛だけでなく、地域の生活や経済にも大きな意味を持っていると考えられます。



▶滋賀県彦根市のキャラクター ひこにゃん

また、彦根城は地域活性化の面でも重要な役割を果たしていると感じました。彦根城を訪れる観光客は、城だけでなく、周辺の商店街、飲食店、土産物店、博物館なども利用するため、観光が地域経済を支える一つの要素になっています。特に、彦根城の周辺には歴史的な町並みが残されており、城を中心として地域全体を歩いて楽しめる観光空間が形成されています。このように、歴史的資源を保存しながら観光に活用することは、地域の魅力を高めるうえで大きな意味があると考えられます。

今回の研修では非常に多くのことを学ぶことができました。ヒアリングにご協力くださいました滋賀県庁のみなさまや、視察にご協力くださいました針江生水の郷のみなさまをはじめ、本研修の実施にご協力くださいましたみなさまと、研修実施をご支援くださいました上智大学ならびに地球環境学研究科に心より感謝申し上げます。